伊東 忠太（1867-1954）「荻外荘」1927 と 藤井 厚二（1888-1928）「聴竹居」1928

一般社団法人 聴竹居倶楽部　代表理事
松隈（まつくま） 章（あきら）

■ 師弟関係にあった伊東忠太と藤井厚二

「荻外荘（てきがいそう）」の設計者である建築家 伊東忠太は、日本初の建築史家として東京帝国大学で教鞭を執っていた。その教え子の一人が京都帝国大学で教鞭を執った建築家 藤井厚二だ。

藤井厚二（写真１）は、東京帝国大学卒業後、明治 32 年（1899 年）に創立された竹中工務店の草創期の大正２年（1913 年）に入社し、大正５年（1916 年）、「大阪朝日新聞本社」（写真２）を完成させ、設計組織の基礎を確立する。その後、大正８年（1919 年）竹中工務店を退社、翌年、武田五一の招きで大正９年（1920 年）に創設された京都帝国大学建築学科に教官として着任し、建築環境工学を確立。研究・教育しながら住宅作家として大正から昭和初期に活躍した。

藤井の代表作が昭和３年（1928 年）、京都府大山崎町に建てた藤井の５回目にして最後の自邸・第５回住宅「聴竹居（ちょうちくきょ）」（写真３～６）である。和と洋の融合されたモダンなデザインと日本の気候風土に適応し、通風・換気・採光や自然素材の利用等を考慮した環境共生住宅として近年注目され、1999 年には DOCOMOMO20 選（日本のモダニズム建築を代表する最初の 20 作品）に選ばれ、さらに平成 29 年（2017 年）に昭和時代に建築家が建てた住宅として初めて国の重要文化財にも指定されている。

写真１　建築家 藤井厚二

写真２ 大阪朝日新聞本社
（（株）竹中工務店提供 ）

写真３ 「聴竹居」全景

写真４ 「聴竹居」南側外観

写真５　「聴竹居」本屋 居室

写真６　「聴竹居」本屋 客室

伊東忠太と藤井厚二は東京帝国大学の師弟関係にあり、その繋がりを年表にして比較したのが次の図である。

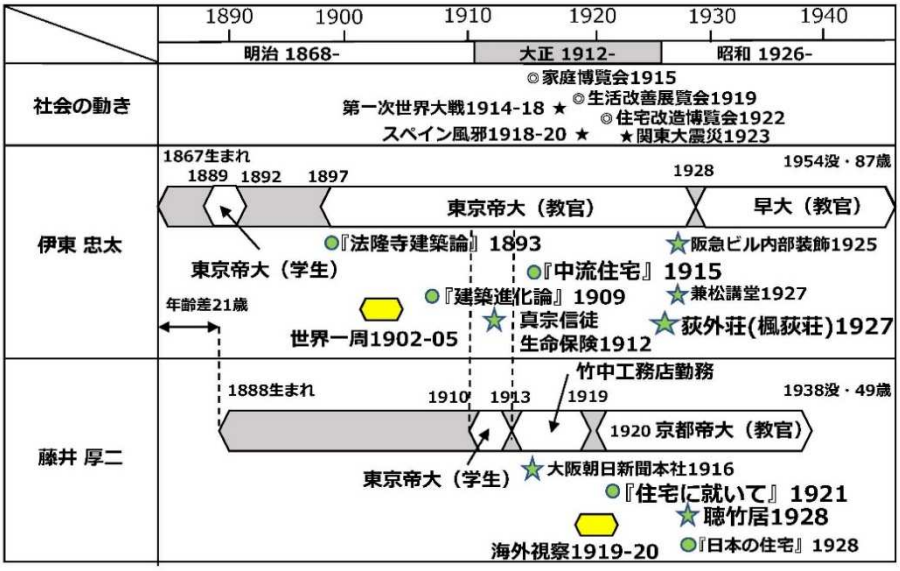

図１　伊東忠太と藤井厚二経歴比較年表

藤井が大学で学んでいた明治 45 年（1912 年）、ちょうどその時期に伊東は「真宗信徒生命保険株式会社本館」（以下「真宗信徒生命保険」（写真７）と記述、現・西本願寺・伝道院）を竹中工務店の施工で完成させている。藤井は東洋と西洋の様式が不思議に混ざり、強烈な印象を与える「真宗信徒生命保険」を生きた教材として学んだことになる。伊東は、昭和４年（1929 年）に「阪急ビル内部装飾」（写真８）、昭和２年（1927 年）には、伊東の義兄の入澤達吉の邸宅「楓荻荘（のちの荻外荘）」と「旧・東京商科大学兼松記念講堂（現・一橋大学・兼松講堂）」（写真９）をいずれも、竹中工務店の施工で完成させている。

写真７　真宗信徒生命保険株式会社本館
（現・西本願寺・伝道院）

写真８ 阪急ビル内部装飾
（（株）竹中工務店提供 ）

写真９ 旧・東京商科大学兼松記念講堂
（現・一橋大学・兼松講堂）

■「聴竹居」に伊東忠太がデザインした「石像」が！？

藤井厚二の代表作・自邸「聴竹居」には「本屋」の玄関先と離れの「閑室」への石段の途中にそれぞれ１体ずつ２体の伊東忠太がデザインした石像（怪獣）が置かれている（写真 10）。この石像は伊東忠太が明治４５年（1902 年）、西本願寺の門前町の一画に完成させた「真宗信徒生命保険（現・西本願寺・伝道院）」の建物周囲に数種類ある石像（怪獣）のひとつとまったく同じものなのである（写真 11）。

写真 10 伊東忠太デザインの「聴竹居」の石像

写真 11 伊東忠太デザインの
「真宗信徒生命保険（現・西本願寺・伝道院）」の石像

藤井が著した『聴竹居図案集』1929 年（昭和４年）岩波書店刊（写真 12）に掲載されている平面図、立面図【図版】共に、はっきりと石像の存在が記されている。京都嵯峨野・二尊院にある自身の墓（写真 13）を生前病床で自らデザインした藤井にとっては、石像をデザインすることはけっして難しいものであったはずはない。明らかにある意図を持って伊東忠太がデザインした石像を置こうとしたと言える。それでは何故、あえてこの石像を置こうとしたのだろうか。残念ながら藤井の遺したものの中にこれに関する記述は見つかってはいない。

伊東忠太は、日本初の建築史家として「日本建築史」を学問として確立するとともに、約 3 年間世界を一周し、その知見を「西洋建築史」、「東洋建築史」として東京帝国大学で学ぶ藤井を含む少数精鋭の学生たちに熱く講義した。さらに、建築家として「建築進化論」を唱え、日本の社寺仏閣を欧米のカテドラルに負けない「日本オリジナルの建築様式」として確立させようとした。そうした影響から藤井は、建築家の使命として欧米の住宅に負けないような「日本の住宅建築の様式」を確立しようと想い、その道標、目標として自邸「聴竹居」に石像（怪獣）を置いたと推察できる。

写真 12「聴竹居図案集」

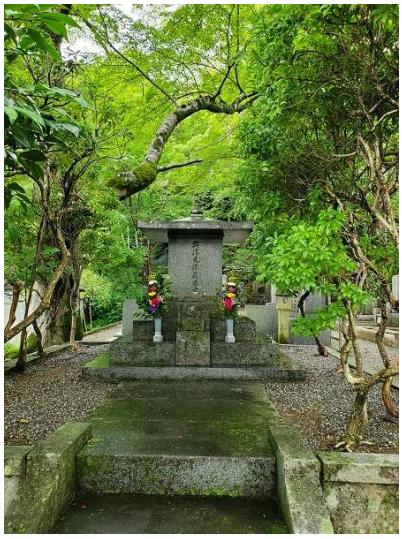

写真 13 自らのデザインによる藤井の墓
（一般社団法人 聴竹居倶楽部提供）

■伊東忠太の寄稿文『中流住宅』と藤井厚二の第１回住宅（自邸）と私家版書籍『住宅に就いて』

西欧化・近代化を推し進めた明治が終わり大正の初めになると、新聞社や出版社が自らの新聞や雑誌を通じて国民の生活改善を積極的に提唱し始めるようになる。1915 年（大正４年）に国民新聞社は家庭博覧会を主催し上野の不忍の池畔で開催している。博覧会開催時に出版された書籍『理想の家庭』に、伊東忠太は、博覧会で 44 坪 5 合の平屋建ての実物大の住宅の模型を制作し展示すると同時に『中流住宅』と題した文章を載せている。

伊東は伝統的な旧式家屋の欠点としては、（イ）全体として根本的に家庭の意味を了解して居ない、（ロ）用材選択の誤謬、（ハ）間取りの研究不徹底の 3 項目を挙げ、縁側が多いから雨戸や戸障子が多く開け閉めが大変で掃除出来ていない、接客本位の造りになっているなどとし、間取りが良く、空気の流通、光線の具合がうまくとれ、快適で堅牢強固であれば良い建築としている。そして、改良の方針として①家族本位として居間を重視、②縁側、廊下を減少、③光線も充分に射し込み、風通しも良い明るく清潔な台所、④間仕切りの建具を減らして壁を増やす、⑤書斎及び応接間は椅子座とする、⑥子供室は椅子座とするとしている。

一方で藤井厚二は、東京帝国大学を卒業後、大正２年（1913 年）に竹中工務店に入社し、翌年、神戸の熊内の高台に最初の自邸・第１回住宅を建てている。しかし、藤井は、かなり便利で良く出来たと思って住んで見たものの物足らぬ点が沢山あり、旧来の住宅を姑息に改良しても駄目、思い切って根本的に改良しなければならないとして、先ず欧米の生活状態やら住宅やら気候風土の関係やらを取調べて、それを参考にして従来の住宅を如何に改良するべきかを研究する必要を認め、それを主な目的の一つとして外国を見物にでかけることを決意している。そして、竹中工務店を退社し、第一次世界大戦の終戦後、大正 8 年（1919 年）から翌年にかけて欧米６ヶ国（アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、イタリア、スイス）を９ヶ月間に亘って視察しているが、世界中でスペイン風邪が流行していた時期に重なる。

帰国後に記した最初の私家版の書籍『住宅に就いて』1921 年（大正 10 年）（写真 14）に、住宅の改良は問題が非常に大きいだけに色々の方面から考えなければならないとして、次々に改良するのが早道とした。先ず改良に就いて注意しなければならない主な点として、１．住宅に重きを置くこと、２．猥に外国の真似をせぬこと、３．趣味を乱用せぬこと、４．見栄を強らぬこと、5．茶道、の５つの事項を提示し、次に先ず改良を試むべき事項として６．腰掛の生活をすること、７．間取、８．衣、食、９．台所、浴室、便所の設備、10．床の間の廃止、11．暖房設備の 11 項目を掲げている。

写真 14　『住宅に就いて』

以上の様に 21 歳の年の差のある師弟関係の伊東忠太と藤井厚二が、欧米に較べ遅れていた日本の建築、特に「住宅」を改良することが建築家の大きな使命だと、それぞれが自覚し基本となる考え方を文章化していた。大正の初めから昭和初期にかけては、『家庭博覧会』の他に住宅改良会を中心に行われた住宅改良運動や生活改善同盟会の活動など、日本人の家庭、住まいを見直していこうとしていた時代だった。そうした時代の潮流に遭遇した藤井が第１回住宅を建て、住んでみて上手くいかなかった後、“日本の住宅の理想形”を追い求め始めようとした時、おそらくは師・伊東忠太の『中流住宅』の言葉に力を得、指針を示され、海外視察を思い立ち、『住宅に就いて１～３』私家版の発行、5 回に及ぶ自邸での改良へと突き進んでいったのではないだろうか。

伊東忠太の存在が無ければ、“日本の住宅の理想形”を生涯求め続けた藤井厚二が誕生することはなかったのである。

■　同時期に竣工した伊東忠太の「荻外荘」と藤井厚二の「聴竹居」

伊東忠太設計の「荻外荘」と藤井厚二設計の「聴竹居」が、ほぼ同時期に１年違いで竣工し、いずれもが現存していることは興味深い。「荻外荘」に最初に居住したのが大正天皇の侍医も務めた医学博士の入澤達吉だった。名称も当時は「楓荻荘（ふうてきそう）」としていたが、近衛文麿が居住した後に、西園寺公望によって「荻外荘」と命名されている。達吉の妻の入澤常子は伊東忠太の妻の姉で、書籍『理想の

家庭』（前述）に「一畳半台所」と題した文章の中で「住宅で最も大切なのは、子供の部屋と台所」としてコンパクトで機能的な台所を提案している。「楓荻荘（現・荻外荘）」は、言わば伊東忠太にとっては義兄夫妻のために設計したまさに『中流住宅』だった。

伊東忠太の「楓荻荘（現・荻外荘）」と藤井自身の５回目の自邸「聴竹居」を比較すると、内外観や椅子や机などの家具や照明に至るまでデザインは全く異なっているものの、「住宅」の改良を建築家の使命だと自覚していたふたりの考え方に基づく共通項をいくつか見つけることができる。

① 平屋建て、② 家族本位として居間を重視、③縁側、廊下の減少、④光線も充分に射し込み、風通しも良い明るく清潔な台所、⑤間仕切りの建具を減らして壁を増やす、⑥書斎及び応接間は椅子座、などが挙げられる。

今から丁度 100 年程前、明治維新以降、西欧化・近代化の中で大正の初めまで造られた洋館や和洋折衷の住宅や住まい方に疑問を呈し、一方で、スペイン風邪の大流行や関東大震災と言った自然災害に見舞われる中で、生活改善や住宅改良を目指して、当時の日本人が、そして建築家たちが懸命に”日本の住宅の理想形”を模索していた。幸いなことに、そうした時代を記憶する昭和初期に建設された京都府大山崎町の藤井厚二「聴竹居」は既に公開され実物を見学し体感でき、東京都杉並区の伊東忠太「荻外荘」も今後同じように実物を体感できるように整備・公開されていく。

新型コロナウィルス感染症の蔓延と大規模な自然災害に見舞われる現代の日本と日本人にとって、これからの先の住まいや暮らしを考えていくためにも、このふたつの住宅の存在は大きいと言えるだろう。

参考文献：藤井厚二『住宅に就いて』1921 年（大正 10 年）私家版
藤井厚二『日本の住宅』1928 年（昭和 3 年）岩波書店
藤井厚二『聴竹居 図案集』1929 年（昭和 4 年）岩波書店
伊東忠太『中流住宅』1915 年（大正 4 年）家庭博覧会図録『理想の家庭』に収録
松隈 章「聴竹居」と石像 2003 年（平成 15 年）鈴木博之編著『伊東忠太を知っていますか』に収録

（文中の写真で特記なきものは、すべて松隈氏提供）